

主人公は悲恋の妖精、マリア 伝説の山、マキリン

濱田 寛 (ジャーナリスト)

Legends of Maria Makiling

首都圏の南郊、ラグナ、バタンガス両州にまたがって、「マキリン」と呼ぶ休火山がすそ野を広げている。標高は1,330mで、フィリピン諸島の最高峰、ミンダナオ島ダバオ市近郊にそびえるアポ山(2,954m)はもちろん、ルソン島で一番高いバギオ市に近いプログ山(2,954m)、今も噴火活動を続ける同島東南端、アルバイ州レガスピ市近くのマヨン山(2,463m)の半分にも満たない。そんなマキリンがこの国で最も有名な山の一つに挙げられている。フィリピンに伝わる神話の中で最もよく知られる妖精、マリア・マキリンが今もこの山に棲むと信じられているからだ。

地元の人たちがマキリンを「マリア」、あるいは「マリアン」と女性の名前で親しげに呼んでいるのを直接、聞いたことがある。いつだったかマキリン山の麓にあるゴルフ場でプレーをしていて、「どうやら今朝はマリアのご機嫌が良くないらしいね」と、フィリピン人のゴルフ仲間が山頂が白い雲に覆われたマキリンを見上げた。グリーンでキャディーは「芝はマリアンの方から順目なので、ボールの転がりは速いですよ」——。

絶世の美女

マキリン山の守護神である妖精のアリアは、筋書きの全く異なるいくつもの伝説に登場するが、どれも決まって小麦色の肌、ツヤのある長い黒髪、輝くような瞳を持つ絶世の美人だ。

マキリンの山容は、見上げる角度によって、顔を上にして横たわるマリア自身に似ているといわれる。

フィリピン大学ロスバニョス校の図書館側から見ると、そのシルエットは頂上にいくつもある突出部がそれぞれ鼻を頂点にした顔、隆起した胸などで、ゆるやかなスロープが長く垂れる彼女の髪だという。

マニラ、マカティから南ルソン高速道を南下して、サンタ・ロサに近づく辺りで、マリアの機嫌が良ければの話だが、マキリンの全容が車窓から望める。だが残念なことに、そこからでは、いくらひいき目に見ても、「絶世の美人」を連想するのは難しい。

結末の悲しい伝説

マリアが登場するすべての伝説は、彼女が美ぼうの持ち主であることに加え、悲しい結末を迎えることでも共通している。

数多い伝説の中から代表すると思われる3編を順不同で紹介してみる。以下はその粗筋。

最初は女神のマリア。命に限りある人間と恋に落ちたため、神々の怒りに触れて姿を山に変えられてしまう。それが今のマキリン山かも知れない。

2番目は、村人の力になり、誰からも尊敬されていた山に棲むマリア。だが恋仲の猟師が人間の女性と結婚したため、悲しみと人間不信に陥って姿を消した。

3番目も村人を助けるマリアで、三人の男から求婚されていた。その中の一人である地元の農夫を「恋人」と宣言したため、恋敵のスペイン人の船長とフィリピン生まれのスペイン人の混血児が共謀してその農夫を殺した。それ以降、マリアは二度と人前に姿を現さなくなった。

禁断の恋

昔々、いまはルソン島のラグナ州として知られる地方に美しい妖精のお姫さまがいた。その名はマリア・マキリン。

人々や森に棲む動物、空飛ぶ鳥、それに海に棲むイルカなどすべての生き物はその美しさにうっとり見とれ、好意を抱いた。

不滅の命を与えられたマリアは神々の寵愛を受けていた。

彼女が棲む土地にある日、屈強な美男子が現れた。向かってくる相手を両手でへし折ったり、大きな丸木舟を遠い彼方まですばやく漕ぐことができ、戦うたびに勝利を収める勇者で、彼の名はマブハイ。

いつしか、マリアとマブハイは恋に落ち、相思相愛の仲になった。愛する二人の情熱に敵うものはなかった。

こうした二人の愛を目に止めた神々が、彼女にマブハイを愛することを許さなかった。

「不滅の命ある者は、命に限りある者を愛してはならない」と神は彼女を諭し、さらに言葉を続けた。「もし掟を破れば、ただ不幸せと悲しみを招くだけだ。愛は与えることも、奪うこともできない。このまま二人が愛し続けるならば、悲嘆と絶望の結末を迎えるだけだ」——。

だが、その言葉に耳を傾けなかったマリアは神々の怒りをかかった。神々はマリアに一撃を加え、彼女の姿を山に変えてしまった。

自分の丸木舟に戻ったマブハイは、山に変えられたマリアを見て愕然とし、あまりの悲しさに溢れ出た涙で舟は水浸しとなって沈没した。大海は彼を引き揚げてマキリン山の最も奥深い洞窟に運んだ。

こうして神々の予言通り、不幸せと悲しみ、心痛と絶望が二人に降りかかった。

ルソン島のラグナ州を訪れると、今も荘厳で美しい「マキリン」と呼ぶ山を見ることができ

恋人に去られたマリア

マキリン山の麓にある静かな森に、村人が「マリア・マキリン」と呼ぶ、魔力を持つ女性が棲んでいた。若くて美人であるだけでなく、村人に慈悲深く、とても親切だった。

マリアは広大な土地の持ち主で、そこには湖に棲む魚から穀物、野菜、果物から木材に至まで資源はきわめて豊富だった。村民が要り用な物は何でも無償で惜しみなく分け与えた。その親切さは遠くの村にまで知れ渡っていた。

ある日の午後、一人の猟師がさまよい歩いて彼女の領地に入り、マリアをひと目見るなり恋に落ちた。彼女もまた、猟師に恋心を抱いた。それからというもの、二人は毎日会って、永久の愛を誓い合った。ところが彼はある日からぱったり訪ねてこなくなった。マリアが確かめると、猟師は人間の女性と結婚していた。

彼女は大きな悲しみと失望に落ち込んだ。心を深く傷つけられた彼女は、村人不信に陥り、彼らと同じ人間でない自分は、人々に利用されていただけに過ぎないことを思い知らされた。

許すということは極めて難しい。彼女の悲しみと失望は怒りに変わった。果物から木材まで、すべての物を与えることを拒み、猟師を捕まえるため、けだものや鳥を放って、辺りを見張らせた。以後、村人がマリアを見ることはほとんどなく、月の光が青白い夜に限って見ることがあるという。

リサール版「マリア」

マキリン山麓の町、カランバ出身で、作家でもあった国民英雄のホセ・リサールは似たような大筋で「恋人に去られたマリア」を記述

しているが、寡黙な男性の性格、結婚に至る状況などは短文ながら興味深い。

「マリアは農夫と恋に落ち、終始、彼を見守り続けていた」——。こんな前書きから始まるストーリーは、農夫は温かく見守られ、かばってもらえる魅力ある性格の持ち主という町の人の噂話に続く。そして若い彼は人がよく、誠実だが、口数は極めて少なかった。とりわけ、マリア・マキリンの森を度々訪れたことを口外することがなかった。

その頃、戦争が起こり、軍隊は独身の男性を徴兵した。若い農夫は見合い結婚をして徴兵を免れ、無事、町にとどまることができた。

結婚する数日前、マリアを訪ねた農夫に対し、「あなたは私一人にすべてを捧げてくれるものとばかり思っていました」とマリアは語りかけ、悲しげに言葉を続けた。「だけどあなたは現世の愛がほしかったのね。私に対する誠実さも足りなかった。誠実だったら、私はあなたとあなたの家族を守り続けるつもりだった」。こう言い残すと、彼の前から姿を消した、農民の誰もが、マリア・マキリンを再び見ることも、彼女のあばら屋を探し出すこともなかった。

三人の求婚者

昔々、ラグナの山にマリア・マキリンと呼ぶ妖精が棲んでいた。彼女は息を飲むばかりの美人だった。マリアは常日ごろから村人の手助けをしていた。ある日、子供が病気になる農夫の父親が、助けを求めてマリアの家を訪ねた。すると彼女はザルー一杯の生姜を父親に与えた。彼はがっかりしながら、生姜の入ったザルをかついで家に戻ってみると、驚いたことに、生姜は黄金に換わっていた。この話が切っ掛けで、親切なマリアが村中の話題になった。

際立つ美しさのマリアは、数多くの男性から求婚されていた。その中で、三人の男がそれぞれ彼女との結婚を決め込んで互いに譲らなかった。一人は船長のララ。スペイン人の船乗りで、

原生林が生い茂るマキリン山。休日にはトレッキング客の姿も見られる



ヨーロッパから戻るたびにお土産を彼女に届けた。もう一人はホセリートと呼ぶ、マニラで勉強するスペイン人との混血児。マリアを訪ねる際はいつも、海外の国々の話や自分が読んだ本の筋書きを聞かせた。彼はスペインに行くのが夢で、フィリピンで住むのが嫌だった。三人目は普通の農夫ながら非常に勤勉なホアン。彼が手をかけて世話をした果物や野菜はどれも大きく育った。本当のことを漏らすと、マリアが心を惹かれていたのはホアンだった。

時が経つほどに、彼女の求婚者はますますせっかちになり、誰を一番愛しているかを、マリアの口から直接聞かせてほしいと迫った。返答の約束を迫られた妖精の彼女は「次の満月の夜、お答えしましょう」。

約束だった満月の夜、彼女の答えを聞くため、求婚者は山に登った。彼女が愛しているのはホアンだと聞かされて、皆が驚いた打ちのめされたような気持ちで求婚者は立ち去った。ホセリートとララ船長は、マリアを射止めたホアンに怒り狂い、彼に対する策略を練った。

ある夜、スペイン人の倉庫から火が出て、建物全体が炎に包まれた。ララ船長は放火の疑いで、多数のフィリピン人を逮捕するよう命じた。ホセリートは密かに船長の手助けをした。ホアンも逮捕されて拷問を受けた。

逮捕者の多くは、スペイン人から繰り返し拷問を受けることはなかった。ある夜、ララ船長とホセリートは収監者と密談した。翌日、ホアンはスペイン人の倉庫に放火した罪に問われた。「私は何もやってない」とホアンは叫んだが、ララ船長らに脅された収監者は彼が火をつけたとホアンを指差した。

兵士がホアンを広場に連れ出し、多くの人々が見守る中、スペインへの反逆者として射殺した。だが、殺される直前、大声でマリアの名前を呼んだ。その声を耳にしたマリアは急いで山から下りた。

しかし、下山してみると、ホアンは既に息を引き取っていた。止めどなく流れ落ちる涙を押さえながら、マリアはホアンの遺体を抱きしめた。そして集まった人に対し、「どうして彼の面倒をみてやらなかったの」と叫んだ。その頃、ララ船長とホセリートの二人はマリアの報復を怖れてマニラへ逃げた。そのことを知ったマリアは二人を呪った。呪いは現実のものとなり、ホセリートは不治の病に冒された。

一方、フィリピン人に対する虐待が理由で反乱が起き、ララ船長はラグナに呼び戻された。革命の動きはフィリピン各地に次々に広がり、フィリピン革命軍はララ船長を銃殺した。

それ以降、誰一人マリアを目撃した者はいなかった。マキリン山に登った人が行方不明になると、アリアの呪いに違いない考える半面、マリアの愛の大きさを思い思い起こした。

黄金に換わった生

数あるマキリン伝説で最もよく知られるのは、「三人の求婚者」の前段にある村民を助けるためにマリアが与えた生姜が黄金に換わるストーリーといわれる。

これは、マキリン山麓の村で母親が病気の我が子、あるいは夫が病気の妻を治療する手だてをしばしば求めるのを疑問に思ったマリアがよく観ると、症状は病気ではなく、極貧からく

る飢えと分かる。そこで黄金に換わる不思議な生姜を村民に与えるのだが、その中には、マリアの黄金を手に入れようとする村民のどん欲さを戒める教訓的な物語もある。

そこで異説を二つ紹介すると……。

(その一)

病気になった妻のため、マリアからもらった生姜を持ち帰る途中、あまりの重さに、軽卒な夫がその一部を投げ捨てる。

(その二)

欲張りな村人は生姜以外にも、マリアの庭に黄金に換わる植物が植わっているのではないかと、彼女の庭に押し入る。その強欲さに失望したマリアは山中に立ち去り、姿を消した。彼女の質素な白い服は、頂上近くにたなびく白い雲とすぐ見分けられなくなった。

マキリン伝説余聞

マキリン伝説を読んでいて、「いかにもフィリピンの民間伝承らしい」と思われるのは、妖精の名前までもがいずれも、長年植民統治したスペインの影響を受けて、当時、最も一般的な名前だった「マリア」、あるいは「マリアン」。神々の怒りに触れて、山に姿を変えさせられた最初の妖精にもその名がついている。

妖精が登場する伝説の山は、マキリン以外にもパンパンガ州のアラヤット山、セブ州のラントイ山などがあり、守護神の妖精はアラヤットがマリア・シンクアんで、ラントイはマリア・カオだという。二人の妖精とも共通して名前がマリアなのは面白い。

もう一つ、「マキリン」という言葉は山の名前をマリアの姓に付けたのか、逆に妖精の名前を山に付けたのか論議されたという。結論は、バイ湖(ラグナ湖)から隆起した山は稜線に凹凸、傾斜があった。「平でない」、あるいは「傾く」を意味するタガログ語は「makiling」なので、初めにマキリンという山の名前があったという見解に軍配が上がったようだ。

ここに挙げたのは、口述されたマキリン伝説の英訳が元になっているが、そのどれもが「Once upon a time」、日本語にすると「昔々」で始まっている。ところが、最後に紹介したものの物語で、妖精を慕った三人の男性の一人はスペイン人の船長、もう一人はスペイン人とのミステーズという設定になっている。スペインの初代総督レガスピーがマニラを拠点にして植民統治を始めたのが1571年。それから数えても、今年で438年にしかならない。日本の歴史でいうと、織田信長が登場する安土桃山時代(1568～1600)以降になる。

日本人にとって、「昔々」はどれだけ昔を指すのか決まりはないが、少なくとも、400年前を「昔々」と言わないのではないか、その頃の題材にした物語に妖精はもう登場しないのではなか……。

国としての歴史が若いフィリピンだが、バランガイ単位の社会は、スペイン、アメリカの植民地になるはるか以前から諸島各地に根づいていた。マキリン山の伝説一つ取り上げても、「タガログ文化」とでも呼べるルソン島中南部の住民生活、物の考え方、そして彼らが歩んできた道程の一端がうかがわれて興味が尽きない。